

バスに乗る



かしおり

バスに乗る

マユとバスに乗った。

平日の昼前で、会社勤めの通勤客も、登下校の高校生も、病院通いの老人さえもいなくて、細長い車内はがらんとしていた。

マユとわたしは後方部にいた。マユはひとりがけの座席にテキストの詰まったトートバッグを置き、わたしはおしりが隠れるほどベルトを伸ばしたリュックを担いだまま、銀色のパイプに絡みつきながら、ただぶらぶらと立っていた。後ろは座席が少なくて広くなっているのだ。

晴れた日だった。温められたゴムやビニールの匂いがした。並ぶシート。白いつるんとしたカバーが短くかけられ、その肩に灰色の取っ手が突き出ている。埃っぽい布製の赤い座面に車窓から入る日光が白く照った。ふくよかなエンジン音とこまかな振動が夏休みのプールあがりのような幸福なけだるさを誘う。

床は車体の中央で傾斜し、前半分が低くなっている。

大きなフロントガラス。

右に座る運転手はその背に運行表が貼り付けてある仕切り板のせいで姿が見えない。ただ、ばかでかいルームミラーに映る紺色の帽子と中年男らしい生真面目にむすんだ口元だけが見えた。

ときどき気まぐれに一番後ろの長いシートに座る。すぐに立つ。わたしが立つとマユが座る。そしてすぐに立つ。膝の切れたジーンズから、マユの、まるで骨みたいに白い膝が見え隠れする。

よろけてステップを踏むたび、乾いた音を響かせた。

車窓を流れる町並みを眺め、バスが止まると歩道の人々を眺めた。

バスに乗ろうと言い出したのはマユなのに、ふいに黙り込んだままぼんやりとしている。なんで今更バス？ と言ったわたしは逆にバスに乗るのなんて久々で、乗り込んだとたん子どものようにはしゃいでいた。

バスはゆっくり右折する。

機械じみた美しい女性の声が聞きなれた地名をアナウンスする。いつも原付で走った街道だった。

大学に通うとき、バイトに行くとき、マユの住む寮に遊びに行くとき、五〇〇〇のポケバイで走る街道だ（そのころ乗っていたバイクは時速四〇キロ以上出すとハンドルがぶれてどこからともなくカタカタと音が鳴り出す中古車だったから、バスやトラックが行きかう街道を走ると、まるで水牛の群にまぎれた鶏みたいだった）。

歩道に並ぶ街路樹の葉々がバスの車窓をかすめる。目線の低いポケバイからは決して目近に見ることのない葉脈まで見えた。

建物も、看板も、道の曲がり具合も良く知っている。見慣れた街並みのはずなのに、バスから見る景色は知らないどこかに見えた。

窓の外を眺めるマユに、そんな新鮮さを話す。そうだね、うんわかる、とあいづちをうちながらマユはそれでもどこか上の空だった。男の子のように短い髪は、その横顔を頬骨まで隠し、とがった顎先と、峻険な氷壁のようなうなじの斜面をむきだしにする。

どこから入り込んだのか、蜜蜂が窓際でじじじと音を立てた。

市バスに乗ろう、とマユこと黛瑛子は言ったのだった。もてあました暇をつぶすためのほんの思いつき、という感じの、そんな軽いニュアンスだった。

出席チェックの厳しい青年心理学の講義に完璧遅刻したとあせって教室に飛び込んだわたしは、息を切らせながら、「し、しばす？」と裏返った声で聞き返した。

青年心理学は教授の急用で休講になっていた。しんと静まり返った教室におずおずと入っていく自分に冷徹なメタルフレーム眼鏡の奥の一重まぶたの教授の細い目が向けられるのを覚悟していたから、暇をもてあました学生たちが談笑する教室内の緊張感のなさに呆けていた。とりあえず単位落とす危機は免れたとほっとして、機械的に反復したマユの言葉は情報処理されず記号のまま宙に浮く。

「市の周回バス。どこまでいっても二百円で、市内をぐるっと一周するやつ」

そう言われてもまだ口を開けたまま突っ立っていたわたしに、マユがおもむろに手を伸ばす。十本の長い指で、ヘルメットで押しつぶされたわたしの髪をかき回した。思わず肩をすくめたわたしを、マユは笑った。

マユの口は大きい。その口をぱかっと開けて声を立てずに笑う笑い方はどこか独特で、わたしはそんな笑い方が好きだった。

その頃のわたしたちと言えば、授業に出るか、授業のためのレポートを書くか、バイトをすることで、あとの残りの時間はほぼ暇つぶしに費やした。男の子とのデートや、コンパにでかけることもときどきはあったけれど、基本的には女友達同士の他愛のない時間、何をするのでもない、ただ学食でコーヒーの紙コップをもてあそびながらおしゃべりをしたり、駅前のショッピングセンターをぶらぶら歩いてみたり、街角の猫を追いかけて写真を撮ったりするのが楽しかった。

周回バスに乗る、というのは、突然の休講がもたらした思いがけない自由時間を埋める暇つぶしとして最適だと思った。「なんで今更バス？」と言ったわたしにぱかっと口を開けて笑いかけたマユを見て、そう思った。

それなのにマユは無口だった。

「どうかした」

わたしは聞く。

「うん。ちょっと思い出した」

「何？」

「昔、子どもの頃、よくじいさんとバスに乗ったんだ」

「へえ」

「やっぱりこういう市内を回るバスなんだけど」

それきりまた黙り込む。

もしかしたらおじいちゃん、死んじゃったのかな、と思った。その思い出に浸っているのかもしれない。わたしもマユと同じようにひっそりと沈黙した。

「じいさん死んだのかな、とか思ってるでしょ」

ふいにマユはわたしの顔を覗き込む。言葉に詰まる。

「元気だよ。ぴんぴんしてる。五年会ってないけど」

そう言って肩をすくめた。実家の母が逐一報告してくれるんだと言う。

「バス乗るまでじいさんのことなんてすっかり忘れてたよ」

いつものようにとぼけた表情で目をくりくりと回す。拍子抜けしたわたしは「そういうもんかもねー」と軽い口調で言い返した。

「このまま忘れたまんまでいてさ、ある日ぽっくり逝かれちゃったら、でもすごい辛いんだろうね」

表情を変えずにマユは言う。

「まあね」

わたしもまた軽い調子のまま答える。

「ああもう二度とじいさんとバス乗ることないんだなって泣けたりするんだろうね、バスに乗るたびに」

「そうね」

「でもさ、今じいさんのこと思い出してもさ、全然泣けない。辛い」

「そりゃそうよ。乗ろうと思えばいつでも乗れるもん」

わたしは握り締めた銀色のポールを握りなおした。バスが揺れ、マユがステップを踏む。床が乾いた音を立てる。窓の外を見たままマユは続ける。

「うん。でもたぶんもう乗らない。乗ってももう子どものときみたいにわくわくしないし、じいさんだってわたしを喜ばせようなんて得意げな気持ちないじゃない。じいさんとバスに乗るっていうイベントは永久にない」

言いたいことは分かるような気がしなくもない。けど、やっぱりよく分からない。

「久々に一緒にバスに乗ろうって誘って見たら」と、だからわたしは言った。マユは呆れたようにわたしを見て首を振る。

「よくこうしてじいさんとバス乗ったよねって思い出語るの？ ありえない」

大きな口の、その端をきゅっと上に曲げて言った。そういう子だった。ぶっきらぼうなのは照れているからで、正直すぎるから飾ることを知らない。

「もうあんなふうと一緒にバスに乗ることないのに、生きてるとなんともなくて、死んじゃったらすごい辛いって、なんか白々しいよね。感情って残酷」

さっきと同じように軽い調子で返せる言葉が、わたしには見つけられなかった。

日の当たる窓際で、蜜蜂が外を求めてもがいている。

*

「ねえママ、バスって大きいね。高いね。遠くまで見えるね」

生まれて初めて乗るバスに三歳の娘ははしゃいだ声をあげる。赤いシートの上でおしりをぼん

ぽん弾ませている。

「静かに。他の人に迷惑でしょう」

わたしは娘の揺れる小さなからだを制しながら頬を寄せてたしなめた。娘は神妙な顔でうなづく。しかし、窓の外に携帯電話ショップの前に結び付けられたいくつもの風船を見つけると、わ、見て！ とまた声をあげる。大きく見開いた目でわたしを見上げる娘に黙ったまま微笑んで、車窓の外に目をやる。ティッシュを配るミニスカートの若い女の子が街路樹の向こうに消えていく。

晴れた日だった。赤い別珍のシートに白い光が落ちている。

いつも使っている軽自動車を車検に出したのだ。代車を用意しましょうかと言う業者に、一日だけのことだからと断った。ふと、娘をバスに乗せてあげようと思いついたのだった。

マユとバスに乗ったのは、たぶんあのひどい失恋よりずっと前のことだ。相手の彼ともまだ出会っていなかったと思う。

生まれて初めて心身ともに深い一体感を覚えた。〈心身ともに深い一体感を覚えた〉なんて、言葉にするとまるで平板で凡庸なものだ。実際そうだったのかもしれない。でも当時の青い自意識は自分たちこそ特別で唯一ですばらしい関係だと信じていた。互いの肌を合わせられるだけ広く強く合わせあった。心の中の奥深くの自分でも気づかなかった感情まで汲み取りあい、共有し一緒に泣き、笑った。手も足も胸も腹も性器も顔も感情も知識も出会う前の思い出さえも、互いのものがすべて互いのもので、そこに区別はなかった。でもやっぱり私たちは若くて平凡な普通のカップルだったのだ。彼の心変わりであっさり壊れたのだから。

「消えちゃいたい」

わたしは何時間も号泣したあとかすれた声でそうつぶやいた。

女子寮のマユの部屋だった。ライトブルーのベッドカバーがわたしの涙と鼻水でぐちゃぐちゃになっていた。部屋の真ん中に置かれたおままごとのように小さなちゃぶ台の上には、シェル石油の貝殻のマークのついたマグカップがふたつ、冷めた紅茶を湛えたまま置かれていた。

「ばか」

マユが言った。

「だって」

「そんなくだらないことで消えてどうすんのさ」

いつものようにからかうような、おどけるような、軽い口調でそう言った。わたしは腹を立てた。くだらないこと？ マユに何が分かるの。そう怒鳴りつけたくて、でも全部が嗚咽になってしまう。まともな言葉にならない。マユは再びしゃくりあげるわたしに呆れたようにため息をつき、入れ替えるね、と言ってふたつのマグカップを持って立ち上がった。

マユになんて分からない。分かるわけがない、と思った。マユには彼氏はいなかった。好きな人もいなかったと思う。わたしの知る限り、それまで付き合った男の子もいなかった。仲の良い男友達はいたけれど、仲が良すぎてまるで男同士のようにだった。「マユは俺らより男前だよ」と言われていた。そんなマユに、甘美で排他的な一体感を覚えるような関係が理解できるわけない

のだ。

ふいに風が前髪を揺らした。窓のカーテンが大きくふくらむ。昼下がりの陽光が部屋の真ん中まで入り込んでまた引き上げる。カーテンと言っても雑貨屋で買ったインド綿の薄い布切れだ。カーテンもない殺風景なマユの部屋にわたしがプレゼントした。その店でいつも焚いていたマグノリアのお香の匂いがかすかにした。子どもの笑い声がどこからか聞こえる。

あちあちと言いながらふたつのマグカップをちゃぶ台に置いたマユは、インド綿のカーテンを無造作にたくしあげ、洗濯ばさみで留めた。ダイレクトな日の光が痩せたマユの体をくっきりと象る。ベランダの格子の向こうで街路樹の緑が揺れた。

「天気いいよー」

おもむろにマユは振り返り、大きな口をぱかっと開けた。

目が痛かった。泣きすぎたせいでもあり、まぶしすぎたせいでもある。

「消えたらだめだよ」

マユは言った。

卒業してしばらくは年に何度か会っていた。わたしはいくつかの恋をして、だけど、マユには話さなかった。なぜだろう、話したくなかった。ときどき会うマユには、そんな話などしたくなかった。マユも自分の恋の話はしなかった。やがてわたしたちは少しずつ疎遠になった。

一度だけ偶然、マユを見かけた。笑っていた。とても嬉しそうに、それは本当に嬉しそうに、あまりに嬉しそうだったから、まるで嬉しさを水増しして見せているようにさえ見えた。流行色の口紅で彩られた、控えめに開けられた大きな口を、細く長いマユの指先が恥らうように隠していた。短かった髪は長く、ゆるやかにウェイブしていた。隣には、落ち着いた感じのスーツ姿の男の人がいた。

不倫の恋をしていると噂で聞いた。自殺未遂した、とも聞いた。嘘かもしれない。マユに訊いてたしかめようとは、でも、思わなかった。しばらくして、結婚しましたというはがきをもらった。訳あって式は挙げてないけど幸せです、と書いてあった。写真はなかった。知らない姓がマユの名の前についていた。黛ではないマユは、もうマユじゃない。

マユとバスに乗ることはもうないだろう。別にそれが悲しいとは思わない。当たり前、普通に、そんなものだと思う。

でも、もし、マユが死んだと聞かされたら、わたしはバスに乗るたびに悲しくて、辛くて、涙を流すのだろうか。

そうだね、マユ。

人の感情なんて白々しくて残酷。

娘の手を引き、わたしはバスを降りた。

〈了〉